

はじめに

二宮尊徳 1787-1856(天明7-安政3) 江戸後期の農政家。幼名金次郎。小田原^{かやま}在栢山村生れ。少年時に父母を失い、伯父の家を手伝い、苦しい農耕をしながら『論語』『大学』『中庸』などを独学。青年期に家を再興。その後、小田原藩土服部家の再建や藩領下野桜町などの荒廃の復旧に成功。この経験をもとに独特の農法・農村改良策(報徳仕法)により、小田原・烏山・下館・相馬藩など約600村を復興。晩年は日光神領の立直しの命をうけ、得意の計量的・合理的な策を立てたが業半ばに死去した。

●二宮金次郎のイメージは？——『尋常小学修身書』巻3(第3期・昭和5年版)を読む



二度もぞくぐんにとらへられ、いろくゝのな
んぎな目にあひましたが、とうくゝくわんぐ
んの司令部^{しらいぶ}について、しゆびよくつかひのや
くめをしとげました。
第三 かうかう
二宮金次郎^{にのみや きんじらう}は、家が大そうびんぼふであつた
ので、小さい時から、父母の手だすけをしまし
た。
金次郎が十四の時父がなくなりました。母は

くらしにこまつて、すゑ
の子をしんるゐへあづ
けましたが、その子のこ
とをしんばいしてまい
ばんよくねむりません
でした。金次郎は母の心
を思ひやつて、私が一し
やうけんめいにはたら
きますから、おとうとを

学校に現存する日本最古の二宮金次郎像は、豊橋市立前芝
小学校のもの。前芝尋常高等小学校時代の大正一三年(一
九二四)一月建立。野良着姿にわらじ履き。左肩に魚籠を
背負い、右手に本を持つから、僕とは利き腕が違つんだね。

夜おそくまでおきてゐ
てわらぢをつくりまし
た。さうしてあくる朝そ
のわらぢをしごとばへ
もつて行つて、私はまだ
一人前のしごとが出来
ませんので、皆さまのお
せわになります。これは
そのお禮^{れい}です。といつて



つれもどして下さい。といひました。母はよろ
こんでそのばんすぐにしんるゐの家へ行つ
て、あづけた子をつれてかへり、おや子いつし
よにあつまつてよろこびあひました。
孝^{かた}ハ徳^{とく}ノハジメ。
第四 しごとにはげめ
金次郎は十二の時から父にかはつて川ぶし
すまして、家へかへると



人々におくりました。

父がなくなつてからは、朝は早くから山へ行き、しばをかり、たきぐをとつて、それをうりました。又夜はなはをなつたり、わらぢをつくつたりしてよくはたらきました。

第五 がくもん

金次郎は十六の時母をうしなひました。やがて二人のおとうとは母のさとに引取られ、金次郎はまんべるといふをぢの家へ行つて、せ

わになりました。

金次郎はよくをぢのいひつけをまもり、一にちはたらいで、夜になると、本をよみ、字をならひ、さんじゆつのけいこをしました。をぢはあぶらがあるのをきらつて夜學をとめましたので、金次郎はじぶんであぶらなをつくり、そのたね



九

銅像が手にする本は『大学』とか『論語』とか諸説ある。作家の半藤一利氏の調査（金属類回収令で供出前の調査）では、本の内容は「忠孝」の二字や、『論語』や『教育勅語』の一節、さらに白紙のものまで様々だったとか。今度見かけたら、調べてみて。

を町へ持つて行つてあぶらに取りかへ、毎ばんべんきやうしました。をぢが又「本をよむよりはうちのしごとをせよ」といひましたから、金次郎は夜おそくまで家のしごとをして、そのあとでがくもんをしました。

金次郎は二十さいの時じぶんの家へかへり、せいでしてはたらいで、のちにはえらい人になりました。

第六 せいとん



本居宣長はたくさんの本をもつてゐましたが、いちく本ばかりに入れてよくせいとんしておきました。それで夜はあかりをつけなくても、思ふやうにどの本でも取り出すことが出来ました。

十一

- 国定教科書に最も登場する人物の一人 → 「孝行・勉学・兄弟・自立・勤勉」の人
- 文部省唱歌「二宮金次郎」（作詞・作曲不明、明治44年「尋常小学唱歌」第2学年用初出）
 - 一、柴刈り縄ない 草鞋をつくり 親の手を助け 弟を世話し 兄弟仲よく 孝行つくす 手本は二宮金次郎
 - 二、骨身を惜まず 仕事を励み 夜なべ済まして 手習読書 せわい中にも 撓まず学ぶ 手本は二宮金次郎
 - 三、家業大事に 費をはぶき 少しの物をも 粗末にせず 遂には身を立て 人をも救う 手本は二宮金次郎
- 作られたイメージ「負薪読書像」／戦前教科書は少年時代のみ → 戦後は桜町領の復興など成人後も
- 戦後GHQも金次郎を最大級に評価し推奨
 - ・インボーデンCIE新聞課長「新生日本は尊徳の再認識を必要とする」（『青年』昭和24年10月号寄稿）
 - ・マーチン北海道地方民事局長 → 尊徳・リンカーンが並ぶ肖像画を牧野重五郎に描かせ、後、道教育大に寄贈

●二宮金次郎の生涯(略年表)

和暦	西暦	年齢	金次郎周辺の出来事
天明 7	1787	1	7月23日、金次郎、栢山(カヤマ)村(現小田原市)豪農の長男として誕生
寛政 3	1791	5	酒匂川決壊、田畑流出 ★2町(6000坪)の田畑を一夜にして失い、金次郎も子守や薪売りで家計を助ける
寛政11	1799	13	堤防補強のために松苗200本を買い、酒匂川に植える／弟、富次郎誕生
寛政12	1800	14	父・利右衛門死去(享年48)
享和 2	1802	16	母・よし死去(享年36) ★全財産を失い一家離散、金次郎は伯父方に寄食、以後、生家再興に生きる
享和 3	1803	17	菜種を収穫／空き地に捨苗を植え、米1俵を得る／「積小為大」の理を体得 ★武家での給金労働のほか、空き時間には薪を売って金を貯め、田畑を買い戻す。入手した田畑は小作に出し、自分は所有者のいない荒地を耕す(新たに開墾した田畑は年貢が免除され、全て収入となった)
文化 3	1806	20	独立し、二宮家再興に着手
文化 7	1810	24	田畑1町4反(4200坪)余となる ★二宮家が失った大半の土地を買い戻し、村内の大地主となる
文化 9	1812	26	藩家老・服部家の若党となる ★服部家は名目1200石、実収入403石ながら1200石の家計を続けていた
文化14	1817	31	きのと結婚／田地3町8反(1万1400坪)余となる
文政元	1818	32	服部家の家政再建開始 ★「期間5年、全て一任」の条件で借金1000両(1億円超)の財政再建に着手。徹底した質素倹約(釜の底の煤を削って薪節約／飯・汁のみの食事／木綿服等)、予算以上の節約功労者に剰余金を与える褒賞金制度 → 5年後、1000両の借金完済のうえ300両貯蓄の偉業達成
文政 2	1819	33	長男・徳太郎誕生するも間もなく病死／きのと離婚(翌年、波子と再婚)
文政 4	1821	35	小田原藩領の桜町領(栃木県真岡市)の調査開始／嫡子・弥太郎誕生
文政 5	1822	36	小田原藩に登用される／名主格として桜町領復興を命じられる ★桜町領は数度の飢饉で困窮し、領民も疲弊荒廃。100年前の記録まで遡って経済状況を精査し、生産量に対する年貢負担が過重と結論。「今後10年間は年貢を半減(2000俵 → 1005俵)」を藩主・大久保忠真(外ヅネ)公に提言。
文政 6	1823	37	田畑・家財など一切を売払い、一家をあげて桜町へ移住 ★自身の全財産を処分した70両を復興資金に充てつつ、10年の復興計画を開始(毎朝4時から村内巡回し農民を指導／投票で勤勉な農民に農具の褒美)
文政 7	1824	38	長女・文(フミ)子誕生
文政 9	1826	40	御組徒格に昇進
文政10	1827	41	村役人の辞表続く／豊田正作、桜町陣屋赴任で仕法困難に(後に改心し仕法に協力)
文政11	1828	42	辞表提出するも却下
文政12	1829	43	成田山で断食参籠 ★農民の意識の変化もあったが、不満を持つ者の妨害もあって改革は進まず、6年目のある日忽然と姿を消した。新勝寺で断食修行し、改革不振の原因を自問自答。断食を始めて21日目に、桜町領の農民達が迎えに来て戻り、改革を再開 → 新たに「報徳金(村民が出資し無利子で貸す基金。返済できなければ仲間の連帯責任となる)」の制度を設け、再び自分の田畑を持つ農民が増え、地域全体の生産性も向上 → 改革から10年で年貢1894俵(予定した年貢1005俵をはるかに超える)+900俵の貯え。この改革手法は「報徳仕法」と呼ばれ、全国の荒廃農村の再生モデルに(全国600カ所以上復興)
天保 2	1831	45	桜町領第一期仕法終了／忠真公より「以德報徳」の賛辞
天保 4	1833	47	青木村(茨城県桜川市)の仕法開始／茄子を食べ凶作を予知
天保 5	1834	48	『三才報徳金毛録』を著す／徒士格に昇格／『報徳訓』執筆
天保 6	1835	49	茂木藩(栃木県芳賀郡茂木町)仕法開始
天保 7	1836	50	『報徳訓』完成／烏山藩(栃木県那須烏山市)救済
天保 8	1837	51	小田原藩内の貧民を救済／大久保忠真公死去
天保13	1842	56	老中・水野忠邦により幕臣に登用される／諱(イメ)「尊徳」と称す
弘化元	1844	58	日光仕法雛形作成を受命 ＊「仕法雛形」は数値表や関数表を主とする地域再建(報徳仕法)マニュアル
弘化 2	1845	59	相馬藩(福島県浜通り北部)の復興仕法開始
弘化 3	1846	60	日光仕法雛形完成(60冊献上)
嘉永元	1848	62	東郷(ヒガシゴウ)陣屋(栃木県真岡市東郷)に一家移転
嘉永 6	1853	67	日光仕法着手／日光奉行手付に転任／文子死去(享年30)
安政 2	1855	69	今市報徳役所に移転
安政 3	1856	70	御普請役に昇進／10月20日永眠

† 今、なぜ二宮金次郎なのか

●五十嵐^{しやう}監督「二宮金次郎は農政家というよりも革命家」*ハフポスト日本版(2018年7月3日)抜粋

【映画「二宮金次郎」公式サイトのカッチコピー】

- またこの男の出番がやってきた。
- 自分の信じる道を全力で進む「革命家」。
- これまで一度も描かれることのなかった二宮金次郎の激動の生涯を初めて完全劇映画化!
- 苦楽も善悪もひとつの円の中。

「復興のやり方が独特なんです。だれが一番まじめに働いていたのか、入れ札で投票して決めてお金を渡すとか、よそから百姓を入れて新しい土地を開拓するとか、今まで小作人だった男に、がんばれば土地を与えて本百姓にするとか……すごく合理的に物事を処すんです。今までの封建的なやり方をぶちこわすようなやり方で、革命的なことですよ

ね」
「農業をやっているけど、農業で稼いでいないんです。幼少のときから薪を売ったり、わらじを編んだり、いわばアルバイトをして小金を稼いでいる。若いころは高利貸しや米相場も経験して、金にまつわることは結構やっていたようです。そこは百姓あがりといいながら、変わっていますよね。ただ、経済と道徳は別個のものではなく、一緒になって動いているという考えを持っている。お金の儲け方にも徳があるというのが、二宮さんの独特の考え方ですよ」

「復興が進んでいくと、二宮さんもお金がもうかるじゃないですか。でもそこで二宮さんは『墓石を建ててはならない。ただ土を盛り上げて、その傍らに松の木を1本植えておけばいい』というようなことを言う。そういう潔さや、金は人のためにという考えを持っている。『推譲』(金次郎が唱えた報徳思想の原則の一つ)ですよ。そこに僕は惹かれるんですよ」
「二宮金次郎が豊田正作(上役の武士)と対立したとき、二宮さんは『一元観』という考え方にたどり着いた。自分に反対する者には反対者なりの理屈があって、その反対者も一つの円の中に入れ込んで、そこから何かが生まれると考えるんです。豊田も最後は二宮金次郎の味方につく。そこまで相手を変える魅力があったし、現代でも二宮さんの思想や手法を大切にしている人が世の中にたくさんいます」

「いまの日本には壊れているところがあると思います。身の丈を知るという『分度』、儲けたお金を人のために使う『推譲』——戦前の修身で二宮金次郎はうまく利用されてしまったところがありますが、今の時代にこそ必要なんじゃないかな、と思うんです」

*五十嵐監督は、金次郎が復興にかかわった土地の自治体などゆかりのあるところから支援を集めた。その一方で、「積小為大」(小さな事を積み重ねて大きな事を成し遂げる)という金次郎の精神に鑑み、クラウドファンディングでも資金を募る。

●山岡正義著『二宮金次郎に学ぶ「人と組織の育て方」』*一部要旨

- (1)少子化による人口減少や地域社会の弱体化など混迷を深める現在の日本社会と、金次郎が生きた天保時代はよく似た環境にあり、その中で金次郎がどのようにして人や地域を復興させたのかを知る良い事例となる。
- (2)金次郎の教えはすべて実証経験に基づく。知恵を絞って実践し、反省して実践しの繰り返しを重ねてノウハウに高めているので利用度が高い。過去のデータに基づき提案されているので、現代人にも納得しやすい。
- (3)富国安民の良法として書き残された実践仕法が600以上あり、人の育成や組織の作り方など、現代の私たちにも生きた成功事例として活用できる。
- (4)その思想・哲学が自身の体験に基づくため大変説得力がある。また彼は、科学者の側面をもちながら、人を差別しない民主主義者である。彼が目指したのは「人の心の開墾」であり、それこそが人間の幸福とした。…彼の思想に触れることで本来の健康な人間精神を回復できる。

† 金次郎の教え

● 報徳思想

二宮尊徳の教説。至誠・分度・推譲・勤労によって道徳と経済を一致させ、富国安民をはかりとする教え。この思想に基づいて結成された報徳社は、特に明治末年以後の地方改良運動や昭和初年の自力更生運動の一翼として民衆の思想善導の役割を果たした。

● 報徳の4つの柱——至誠・勤労・分度・推譲 *【】の数字は福住正兄編『二宮翁夜話』の収録順を示す

①至誠=真心を尽くす。その人やその物が持つ長所や良さを最大限に引き出し合う。≡ 正直

【139】我が道は至誠と実行のみ。…故に才智弁舌を尊まず、至誠と実行を尊ぶなり。古語に「至誠神の如し」と云いへ共、至誠は則神と云うも、不可なかるべきなり。凡世の中は智あるも学あるも、至誠と実行とにあらざれば事は成らぬ物と知るべし。

②勤労=物事をよく見極め、社会に役立つ成果を考えて働く(至誠を行動に表すこと)。

【75】夫人は一心を決定し動さざるを尊むなり。夫、富貴・安逸を好み貧賤・勤労を厭ふは、凡情の常なり。…夫、農夫の暑寒に田畑を耕し、風雨に山野を奔走する、車力の車を押し、米搗きの米を搗くが如き、他の慈眼を以て見る時は、其勤苦云べからず、気の毒の至なりといへ共、其身に於ては、兼て決定して、労働に安ずるなれば、苦には思はぬなり。

③分度=自分の立場や状況をよく弁えて生活する。経済力に見合った生活。≡ 分限・始末

【38】夫、分限を守らざれば、千万石といへども不足なり。一度過分の誤を悟て分度を守らば、有余おのづから有て、人を救ふに余あらん。…百石の者は、五十石に屈んで五十石の有余を譲り、千石の者は、五百石に屈んで五百石の有余を譲る。是を中庸と云べし。…人々皆此誤を悟り、分度を守りて克譲らば、一郷富栄にして、和順ならん事疑ひなし。

④推譲=①～③により生じた余剰・余力の一部を子孫や社会に譲ること。

【146】初て家を興す人は、自常人と異なれば、百石の身代にて五十石に暮すも、人の許すべけれど、其子孫となれば、百石は百石丈、二百石は二百石丈の事に交際をせざれば、家内も奴婢も他人も承知せざる物なり。故に終に不足を生ず。不足を生じて、分限を引去る事を知らざれば、必滅亡す。…推譲の道は百石の身代の者、五十石にて暮しを立て、五十石を譲るを云。此推譲の法は、我教第一の法にして、則家産維持、且、漸次増殖の法方なり。家産を永遠に維持すべき道は、此外になし。

● 積小為大 *小を積んで大となす

【14】大事をなさんと欲せば、小さな事を、怠らず勤むべし。小積りて大となればなり。凡小人の常、大なる事を欲して、小さな事を怠り、出来難き事を憂ひて、出来易き事を勤めず。夫故、終に大なる事をなす事あたはず。夫、大は小の積んで大となる事を知らぬ故なり。…千里の道も一歩づつ歩みて至る。山を作るも一簣の土よりなる事を明かに弁へて、励精小さな事を勤めば、大なる事必なるべし、小さな事を怠にする者、大なる事は必出来ぬものなり。

● 天道と人道 *天道(人為が皆無で自然に行われる道)と人道(人が意識的に努める道)を明確に区別

【182】天道は自然なり。人道は天道に随ふといへ共、又人為なり。人道を尽して天道に任すべし。人為を怠にして、天道を恨る事勿れ。夫、庭前の落葉は天道なり。無心にして日々夜々に積る。是を払はざるは人道に非ず。払へども又落る。之に心を煩し、之に心を勞し、一葉落れば、箒を取て立が如き、是、塵芥の為に役せらるなり。愚と云べし。木の葉の落るは天道なり。人道を以て、毎朝一度は払ふべし。又落るとも捨置て、無心の落葉に役せらる事勿れ。又、人道にして積り次第にする事勿れ。是人道なり。愚人といへども悪人といへども、能教ふべし。教て聞ざるも、是に心を勞する事勿れ。聞ぬとて捨る事なく、幾度も教ふべし。教て用ひざるも、憤る事勿れ。聞かずとて捨るは不仁なり。用ぬとて憤るは不智なり。不仁・不智は徳者の恐るゝ処なり。仁智二つ心掛て、我が徳を全ふすべし。

- 道徳経済一元論** ※二宮翁夜話』に「経済」は13回、「道徳」は6回登場するが、有名な「経済なき道徳は戯言、道徳なき経済は犯罪」は尊徳の著作には見えない。「経済」「道徳」が同時に出てくるのは第213話のみ。

【213】学者、書を講ずる悉しといへども、活用する事を知らず。徒らに仁は云々、義は云々と云り。故に社会の用を成さず。只本読みにて、道心法師の誦経するに同じ。古語に「権量を謹み法度を審にす(度量衡を厳正にし、礼楽制度を整える)」とあり。是大切の事なり。之を天下の事とのみ思ふ故に用をなさぬ也。天下の事などは差置て、銘々己が家の権量を謹み、法度を審にするこそ肝要なれ。是、道徳・経済の元なり。家々の権量とは、農家なれば家株、田畑何町何反歩、此作徳何拾円と取調べて分限を定め、商法家なれば前年の売徳金を取調べて、本年の分限の予算を立る。是、己が家の権量、己が家の法度なり。是を審にし、之を慎んで越えざるこそ、家を齊ふるの元なれ。家に権量なく法度なき、能く久しきを保んや。

*道徳とは——

【143】世の中刃物を取り遣りするに、刃の方を我が方へ向け、柄の方を先の方にして出すは、是道徳の本意なり。此意を能押弘めば、道徳は全かるべし。人々此の如くならば、天下平かなるべし。夫刃先を我方にして先方に向ざるは、其心、万一誤ある時、我身には疵を付る共、他に疵を付ざらんとの心なり。万事此の如く心得て我身上をば損す共、他の身上には損は掛じ、我が名誉は損する共、他の名誉には疵を付じと云精神なれば、道徳の本体全しと云べし。是より先は此心を押広むるのみ。

*経済とは——

【176】此の如き(博奕や娼妓屋など国家に害をなす商売)は、経済とは云べからず。眼前一己の利益のみを見て、後世の如何を見ず、他の為をも顧ざるものなればなり。…夫、天下の経済は此の如くならずして、公明正大ならずばあるべからず。『大学』に「国は利を以て利とせず、義を以て利となす」とあり。是をこそ、国家経済の格言と云べけれ。

- 一元融合** *成田山での21日間の断食修行で悔悟した境地。世の中の一切が互いに関連し、働き合って一体となっていることを自覚し、一見対立する事柄を一体的にとらえること。思想的には神儒仏三教の良い点を学び、人生の指針とすること。二宮翁は「一元」という言葉を使うが、「一元融合」は後人の造語。

「見渡せば敵も味方もなかりけり、□□□□□□(7文字) 心にぞある」

「打つ心あれば打たる世の中よ、□□□(3文字) 心の打たるは無し」

【26】古語に「遠山木なし、遠海波なし」といへるが如し。故に我身に疎き遠近に移して諭す也。夫、遠近は己が居処先定りて後に遠近ある也。居処定らざれば遠近必なし。「大坂遠し」といはば関東の人なるべし。「関東遠し」といはば上方の人なるべし。禍福・吉凶・是非・得失、皆是に同じ。禍福も一つなり。善悪も一つなり。得失も一つ也。元一つなる物の半を善とすれば、其半は必悪也。然るに其半に悪なからむ事を願ふ。是、成難き事を願ふなり。夫、人生れたるを喜ばば、死の悲しみは随て離れず。咲たる花の必ちるに同じ。生じたる草の必枯るにおなじ。…死生は勿論、禍福・吉凶・損益・得失、皆同じ。元、禍と福と同体にして一元なり。吉と凶と兄弟にして一元也。百事皆同じ。只今も其通り、通勤する時は「近くてよい」といひ、火事だと云と「遠くてよかりし」と云也。是を以てするべし。

【金次郎-四方山クイズ】

- 尊徳は身長 尺(約 cm)、体重 貫(約 kg)の強健な大男で、合理的精神に富み、和漢の古典を独自に読み替える独特の才能があった。(『日本大百科全書』)
- 「二宮尊徳には、一度会ったが、いたって 人だったよ。だいたいあんな時勢には、あんな人物がたくさんできるものだ。時勢が人を作る例は、おれは確かにみたよ」(勝海舟『水川清話』)
- を食べたところ、まだ夏の前なのに秋の味がしたことから、その年が冷夏になることを予測。村人たちに指示して冷害に強いヒエを大量に植えさせた。予測通りその年は冷夏で、天保の大飢饉が発生した。(富田高慶『報徳記』)

+++ 金次郎の人と組織の育て方

●心田開発 *二宮翁は「心田」という言葉を第92話で1回だけ使用。

【59】 我本願は、人々の心の田の荒蕪(雑草が生い茂り荒れ果てた土地)を開拓して、天授の善種、仁義礼智を培養して、善種を收獲し、又時返し時返して、国家に善種を時弘るにあり。…夫、我道は、人々の心の荒蕪を開くを本意とす。心の荒蕪一人開く時は、地の荒蕪は何万町あるも憂るにたらざるが故なり。…汝が兄一人の心の開拓の出来たるのみにて、一村速に一新せり。

【92】 我道は、荒蕪を開くを以て勤とす。而て荒蕪に數種あり。田畑實に荒れたるの荒地あり。又、借財嵩みて、家禄を利足の為に取られ、禄ありて益なきに至るあり。是、国に取て生地(作物が育てられる土地)にして、本人に取て荒地なり。…又、資産あり金力ありて、国家の為をなさず、徒に驕奢に耽り、財産を費すあり。国家に取て尤大なる荒蕪なり。又、智あり才ありて、学問もせず、国家の為も思はず、琴棋書画などを弄して生涯を送るあり。世の中の為尤惜むべき荒蕪なり。又、身体強壯にして、業を勤めず、怠惰・博奕に日を送るあり。是又自他の為に荒蕪なり。此數種の荒蕪の内、心田荒蕪の損、国家の為に大なり。次に田畑山林の荒蕪なり。皆勤て起さずばあるべからず。此數種の荒蕪を起して、悉く国家の為に供するを以て、我道の勤とす。「むかしよりの捨ざる無き物を、拾集めて民にあたへん」、是、予が志なり。

*「人の捨てざる無き物」とは、自分が持っているながらその価値に気付かず、活かすことができないもの。

●至誠と実行 *人づくり・組織づくりの秘訣を説いた『二宮翁夜話』の一節

【39】 学問は活用を尊ぶ。万卷の書を読むといへ共、活用せざれば用はなさぬものなり。論語に「里は仁をよしとす。撰んで仁に居らざれば焉ぞ智を得ん(住む場所は人情のある土地を上等とする。選んで人情のある土地に住まないようでは、どうして知的でいられるだろうか)」とあり。誠に名言なり。然といへども、遊歴人や店借人(借家人)などならば、撰んで仁の村に居る事も出来べし。されど、田畑・山林・家・蔵を所有する何村の何某なる者、如何なる仁義の村があればとて、其村に引越す事出来べきや。さりとて、其不仁の村に不快ながら住居ては、智者とは云はれざる勿論なり。扱、断然(きつぱり)と不仁の村を捨て、仁義の村に引越す者ありとも、我は是を智者とは云ず。書を読んで活用を知らざる愚者と云べし。如何となれば、何村の何某と云る程の者、全戸を他村に引移す事容易にあらず。其費用も莫大なるべし。此莫大の費金を捨、住馴し古郷を捨る、愚にあらずして何ぞ。夫、人に道あり。道は、蛮貊(南方の蛮人と北方の蛮人)の邦といへども行はる物なれば、如何なる不仁の村里といへ共、道の行れざる事あるべからず。自 此道を行ひて、不仁の村を仁義の村に為して、先祖代々其処に永住するをこそ、智といふべけれ。此の如くならざれば、決して智者といふべからず。然して其不仁の村を仁義の村にする、甚難からず、先自分道を踏で、己が家を仁にするにあるなり。己が家仁にならずして、村里を仁にせんとするは、白砂を炊で飯にせんとするに同じ。己が家誠に仁になれば、村里仁にならざる事なし。古語に曰、「一家仁なれば一国仁に興り、一家讓あれば一国讓に興る」、又曰、「誠に仁に志せば悪なし」とある通り、決して疑ひなき物なり。…古語に「直を挙て諸の曲れるを措く時はよく曲れる者をして直からしむ」とある通り、善人を挙げ直人(まっすぐで正しい人)を挙て、厚賞誉して怠らざる時は、必四五ヶ年間を出ずして、整然たる仁義の村となる事、疑ひなき物なり。世間の富者、此理に闇く書を読んで活用を知らず、我家を仁義にする事を知らず、徒らに迷を取て、村里の不仁なるを悪み、「村人義を知らず。人氣(人々の気風)悪し、風儀悪し」と詈り、他方に移らんとする者往々あり、愚と云べし。

●投票による表彰制度 *トップダウンの独断的な表彰ではなく、村人同士の投票による表彰制度を採用

- ・よく働く者や善行者を村民の投票によって選び、農具や金品を与えた。記名投票で女性にも投票させた。
- ・選ぶ側の責任と一村全体の意思の表明であり、選ばれた側にも誇りとともに責任や義務を意識づけた。
- ・受賞者が「骨髓に徹して有難く」と受け取る表彰制度は、民主的・教育的なものだった。

【43】 村里の興復は直を挙るにあり。土地の開拓は沃土を挙るにあり。然るに、善人は兎角に退ひて引籠る癖ある物なり。勤て引出さざれば、沃土は必卑く窪き処にありて、掘出さざれば顕れぬ物なり。…村里を興復する、又同じ理なり。善人を挙て、隠れざる様にするを勤とすべし。又土地の改良を欲せば、沃土を掘出して田畑に入るべし。村里の興復は、善人を挙げ出精人を賞誉するにあり。是を賞誉するは、投票を以て耕作出精にして品行宜しく心掛宜しき者を撰み、無利足金、旋回貸附法を行ふべし。

*無利息金の旋回貸付法は、杵と臼で米を搗くようなもので、臼の中央を搗くだけで、臼の中の米は自然と白米となる。貸付金の返済が滞りさえしなければ、村内が自然と富裕になっていく(ただし返済が滞れば、貸付制度が破綻するため、貸付の際は十分説諭すべきと説いた。

- **五常講** *文化11年(1814)に考案、文政3年(1820)に小田原藩士の五常講創設。五常を遵守するメンバーによる信頼の相互扶助金融制度。無利子、無担保で100日を限度に貸し、返済時に冥加米を支払う。
 - *「五常」は、人が常を守るべき五つの道。仁(人を思いやる)・義(利欲にとらわれず、なすべきことをする)・礼(仁を行動に表す)・智(道理をよく弁える)・信(誠実で信頼を裏切らない)。→ 童門冬二氏によれば、「仁」の心で分度を守り、余裕のある人が困っている人にお金を推譲し、借りた者は「義」の心で正しく返済し、「礼」の心で冥加金を差し出すなどの心配りをし、「智」の心で借りた金を運転し、「信」の心で約束を守る、すなわち人倫五常の道を守ろうとするもの。
- ・世界に先駆けた信用共同組合(19世紀中頃のヘルマン・シュルツェ・デーリチュ「ドイツ市街地信用組合」(1850年~)やフリードリッヒ・ウィルヘルム・ライファイゼン「ドイツ農村信用組合」(1864年~)とされるが、尊徳の「五常講」は1820年設立、大原幽学の「先祖株組合」は天保9年(1838)設立である。*「先祖株組合」は、村民が所有地を提供し、その収益を土地開拓・改良の資金や生活困窮者の救済に当てる協同組織)。

- **芋こじ** *尊徳の著作には見えないが、福住正兄『富国捷徑』初編(第3会議弁)に尊徳が常用したことを記す。

社中折々集会して、身の修め方世間の附合、家業の得失、農業の仕方、商法の掛引、又心配筋の事、自分に決し難き事など、皆打明けて相談して、「夫よりは此の方がよい」「是よりはあの方が宜しい」、又、「是より此の方が徳だ」「夫より此の方が便利だ」と、相互に相談するのでござる。又、教導職に説教を頼み、又、学者に正講をも頼み、聴聞して益善心を固くするが宜いのでござる。此集会を為す事をニ宮先生は「芋こじ」と常に申されたでござる。是は集会に度々出るは芋こちをする様なもので、相互にすれ合て汚れが落て、清浄になると云譬でござる。

- ・「芋こじ」は、水と里芋を桶の中に入れ、こじ棒でかき混ぜながら汚れを落とすことで、寄り合いに集まった仲間同士の切磋琢磨や一種のブレンストーミング。
- ・ブレンストーミングでは、①批判しない、②自由奔放に発言、③質より量、④他人の意見との連想や結合などが大切だが、原発事故後、被災地の福島県南相馬市に設立されたNPO法人「浮船の里」で、毎月行われる住民の話し合いの場「芋こじ会」の世話役をしてきた井上岳一氏は次のように述べている。

立ち上げ時から、芋こじ会のファシリテーターを務めてきましたが、事前に暗黙のルールとして決めたのは、話し合うべきテーマを決めず、アウトプットもゴールも定めないことでした。一見ズルズルの会合ですが、どうしてそれが住民達の新しい取り組みを生む場として機能していったのか。

一つには、結論を急がなかったからだと思います。原発被災地が抱える問題は大きすぎて、簡単に答えの出ない問題ばかりです。個人としても判断がつかない問題ばかり。そういう状況の中で夢を語っても虚しいし、判断を迫っても致し方ない。だから、答えの出ない問題には答えを出そうとしない。でも、問題そのものをないことにもしない。そして、直視するのは疲れるので、とりあえず宙吊りにしておく。そうやって宙吊りにしておけば、忘れないうちに、無視もできない。すると、その問題の重みに押されるようにして、不思議と、何かが始まっていくのです。

もう一つ、聞き役に徹する役割としてファシリテーターを置いたことも大きかったと思います。ファシリテーターをあえて定義するなら、「一番熱心に聞く人」「聞き役に徹する人」だというのが、3年間芋こじ会のファシリテーターを続けてきた中で辿り着いた結論です。ファシリテーターは、議事進行をする人でも、意見をまとめる人でもなく、その本質は、「聞き役」です。聞いてくれる人がいるから話せるし、話したいと思う。また、話し合いをしていれば、どうしたって感覚の違いや意見の違いは出てきますが、その時に、聞き役に徹する人がいると、異なる意見が異なるままに受け止めてもらえる。意見の違う人の話を真正面から受け止めるには度量がいるけれど、聞き役に向かって話している話を横から聞いている分には案外聞けるものです。そうやって冷静に聞いているうちに、「なるほど」とか、「一理はあるよな」と思えてくる。ですから、ファシリテーターが何も結論を出さなくても、ただ聞いているだけで、その場にいる人たちが勝手に歩み寄ってくれる。聞き役という緩衝役がいることで、「芋」同士が、うまくすれ合い、磨き合うようになるのです。…

後で知ったのですが、二宮尊徳の思想を受け継ぐ人達は、それぞれに芋こじの実践をしているようです。組合員一人一人の資産が1億円を超え、最も成功した漁協として有名な北海道のサロマ漁協では、昭和39年から毎月、欠かさず芋こじと名付けた常会をしてきたそうです。尊徳の生まれ故郷の小田原市では、市長と住民の対話集会が芋こじと呼ばれています。

話し合えば何かが動き始める。逆に言えば、話し合わない限り、何も始まらない。そのことを実感させてくれるのが芋こじです。この魔法に満ちた芋こじ、皆さんの職場や地域でも始めてみてはいかがでしょうか？

++++ 受け継がれる金次郎の思想 * 以下は山岡正義著『二宮金次郎に学ぶ「人と組織の育て方」』を参照。

●金次郎に師事した経済人

渋沢栄一(1840～1921) * 日本資本主義の父。日本銀行の創立や500近くの民間会社の設立に係わる。道徳と経済の調和を重視し、金次郎の思想を後世の経済・産業人に広く伝えた。

「商業において絶対に忘れてならないことは公益と私益のあり方についてである。ややもすれば世界では商業は私益のためという解釈が一般的とされているようだが、これは間違いである。商業における公益と私益は一つである。公益はすなわち私益。私益はすなわち公益。私益よく公益を生ず。公益となるほどの私益でなければ真の利益とは言えない。これが『論語とソロバン』の云わんとするところである」

安田善次郎(1838～1921) * 安田財閥の祖。20歳で江戸に出て經節屋兼両替商に奉公。後、独立して安田商店を設立し両替商を営む(後に安田銀行→富士銀行→みずほ銀行と発展)ほか、損保・生保会社を次々設立。

・金次郎の推譲の精神に習い、東京大学の安田講堂・日比谷公会堂・安田庭園などを寄贈。

『報徳記』を座右の書とし、金次郎の生き方を目標とした。分限(分度)を定めて儉約貯蓄に務め、金の使い方も教えに習った。「死に金は一銭たりとも使わない。金は生かして使う」と語り、至誠実行をモットーに生きた。

鈴木藤三郎^{とうざぶろう}(1855～1913) * 発明家・実業家・政治家。日本製糖業の父。食品工業機械化の先駆者。豊田佐吉とともに発明王・特許王と呼ばれ、日本の産業革命のリーダーの1人。22歳で尊徳の教えで出会い、報徳社に加入。

・当時大きな課題で、誰もなしえなかった砂糖の国産化に挑む。「至誠・勤労・分度・推譲の信念と根気さえあれば、天下に必要な事業が成らないはずはない」と信じ、無学歴・無資本・無支援のなか7年を要して製法の開発に成功。後に農林学校を設立し、衆議院議員を務めた。「報徳が普及すれば理想社会が実現する」と確信していた。

御木本幸吉^{みきもと}(1858～1954) * 日本の実業家。真珠王。20歳で東京～日光方面へ旅行した際、金次郎を知って大きな感銘を受け、尊徳思想の強烈な信奉者となる。特に『二宮翁夜話』は座右の書で「七回味読した」と語る。

・当時、天然の真珠が高値で取引され、アコヤ貝が絶滅の危機に瀕していた。真珠の養殖を志した彼は、「海の二宮尊徳たらん」という心意気で幾多の困難を克服し、真珠養殖の商業化に成功。リスクを避けるために養殖の実験場を2カ所に分ける「二段構え」も『夜話』の教えによるという。

豊田佐吉^{とよだ}(1867～1930) * 日本の発明家(生涯で発明特許84件・外国特許13件・実用新案35件)・実業家。父・伊吉は地元で報徳社を創立したほどの熱心な信奉者であった。

・母の布を織る姿を見て「なんとか負担を軽くしてあげたい」と織機の開発に取り組み「豊田式木製人力織機」を完成。その後も飽く無き研究開発に努め、生涯を通じ119件の特許を得た。明治末期、外遊先のアメリカで自動車産業の可能性を感じ、息子・喜一郎に「これからは自動車工業の時代だ。お前は自動車を作って国のために尽くせ」と告げた。喜一郎も出身地の報徳社社長を長く務めていた。トヨタ自動車の「自動化ではなく自動化」「改善し続ける」「ムリ・ムラ・ムダを無くす」などは尊徳思想に根ざしている。

松下幸之助(1894～1989) * 日本の実業家・発明家・著述家。経営の神様。現パナソニック創業者。

・22歳で独立し、電球ソケットの製造を開始。大正7年、松下電気器具製作所を創業し、次々と大ヒットを飛ばし、高度経済成長に乗じて事業を拡大。世界でもトップクラスの電器メーカーに育て上げる。

・戦後いち早くPHP研究所を立ち上げ「物心両面の繁栄を通じて平和と幸福をもたらそう」と宣言。松下は「ただ稼げばよい、働けばよいと考えるのは間違いである。企業活動は営利と社会正義の調和に配慮し、国家社会の発展を計り、もって社会生活の改善と向上を目指すという経営理念を持つべきである」と道徳経済一元論を提唱。

・また、昭和54年には「政治を正さなければ日本は良くならない」をスローガンに、政治家や経営者など日本のリーダーを養成するため「松下政経塾」を私財70億を投じて創設。この活動も、推譲の精神に通じるものである。

●世界に広がる金次郎の思想

(1) バングラデシュのグラミン銀行—マイクロクレジットとソーシャルビジネス—

グラミン銀行は、マイクロクレジット(無担保少額融資)と呼ばれる融資手法により草の根レベルの起業を促し、それによってバングラデシュの貧困の削減に大きく貢献している銀行。創設者はムハマド・ユヌス氏。その活動が評価され、ノーベル平和賞を授与された。

グラミン銀行の原点は、高利貸しから金を借りて苦しむ女性の姿であった。金を貸す場合のネックは、彼女たちには担保も無く、保証人も無く、確実に返済できる収入も無いことだった。ユヌス氏は、5人ずつのグループを作らせ、そのメンバーの1人に貸すという形にした。すると彼女たちは自分が借金を返せないと他のメンバーに迷惑が掛かると思い、必ず返済した。なんとこのシステムの貸金返済率は98%という驚異的な成績であった。これは、二宮金次郎の「五常講」と全く同じ金融方式である。

グラミン銀行の貸出先はほとんどが女性で、女性が自立して生活できるように自営業資金として貸す。お金を借りた女性は、自分に合ったソーシャルビジネス(社会公益事業)を始め、稼ぎ出す。

今やグラミン銀行はバングラデシュ国内最大の銀行になっている。このように、マイクロクレジットによるソーシャルビジネスは今後、他の開発途上国に適したシステムとして伸びていくであろう。

(2) 国際二宮尊徳思想学会

2002年、北京大学で開催された「二宮尊徳思想国際シンポジウム」(北京大学日本文化研究所・報徳博物館共催)を機に2003年に二宮尊徳の思想の研究と普及を目的とする「国際二宮尊徳思想学会」が設立。日本・中国を始め、米国・カナダ・英国・韓国などの研究者が集まり、2年に1回交流。特に、中国における貧富の差の拡大、環境の悪化、政官界の腐敗等の諸問題解決のために「道徳経済一元論」「勤労・分度・推譲論」を活かすべく研究が活発化。

† † † † † 「代表的日本人」として

●内村鑑三著『代表的日本人(REPRESENTATIVE MEN OF JAPAN)』*原書は英文

・「代表的日本人」として取り上げた日本人は、西郷隆盛・上杉鷹山・二宮尊徳・中江藤樹・日蓮の5人。

・以下は「二宮尊徳-農民聖者(NINOMIYA SNOTOK — A PEASANT SAINT)」の一節。

「キュウリを植えればキュウリとは別のものが収穫できると思うな。人は自分の植えたものを収穫するのである」

「誠実にして、はじめて禍を福に変えることができる。術策は役に立たない」

「一人の心は、大宇宙にあっては、おそらく小さな存在にすぎないであろう。しかし、その人が誠実でさえあれば、天地も動かさう」

「なすべきことは、結果を問わずなされなくてはならない」

これらのことを述べたり、またこれに類する多くの教訓によって、尊徳は、自分のもとに指導と救済とを求めて訪れる多数の苦しむ人々を助けた。こうして尊徳は、「自然」と人との間に立って、道徳的な怠惰から、「自然」が惜しみなく授けるものを受ける権利を放棄した人々を、「自然」の方へとひき戻しました。私どもの同類であり同じ血を共有する、この人物の福音とくらべると、近年、わが国に氾濫している西洋の知とは、いったい何でありますか！

●武者小路実篤著『二宮尊徳』序文

二宮尊徳はどんな人か。かう聞かれて、尊徳のことをまるで知らない人が日本人にあつたら、日本人の恥じだと思ふ。それ以上、世界の人が二宮尊徳の名をまだ十分に知らないのは、我らの恥だと思ふ。…

幕末の人間の内、僕は二宮尊徳が一番大人物だつたと思つてゐる。西郷隆盛が二宮尊徳の教をきいて実に感心したそうだが、その話を聞いた時、隆盛は矢張りいい処があると思つた。

二宮尊徳から、生きた教訓を受けて、立派な人間になつた人は、日本に存外多いのだ。…しかし、多くの人は尊徳のことをあまりに知らなすぎる。それは実に惜しいことだと思ふ。…

尊徳のやうに真剣に、考へ又生きた人は珍しい。…彼は実に多くの生命のために働き、之を救つた。彼は自分の家の富むことなぞまるで考へず、人間全体が富むことを考へ、人類全体が安楽にくらせる道を考へてゐた。彼の実行しようと思つたことが実行されていたら、日本は世界で一番立派な安穩な国になつてゐたであらう。…

■天保大飢饉時、尊徳の名演説 * 内村鑑三『代表的日本人』3「二宮尊徳―農民聖者」より

* 天保7年(1836)、小田原藩主、大久保忠貞(56歳で、当時、老中首座)の命を受けた尊徳が小田原へ急行

数千の人々が餓死寸前にあったとき、尊徳は、領主(当時江戸在住)から、迅速な救済にあたるようにと委任を受けました。尊徳は、そのころ2日の道のりの小田原に直行するなり、役人たちに、飢民を救うために、城の倉庫を開く鍵を渡すように求めました。

「殿様直筆の文書がなくては」と、尊大にかまえた答えが返って来ました。

「よろしい」尊徳は応じました。

「そのかわり、今から殿様直筆の許可状が到着するまでの間に、多くの飢えた領民の餓死を招くことになります。領民を忠実に守るべき身の我々は、領民が食物を断たれているように食を断ち、使者の帰るまで、この役所のなかで当然断食をして待たなくてはなりません。そうすることで人々の苦しみも、多少なりともわかるであります」

役人どもにとり、4日間の断食など、とても恐ろしくて思いもつかぬことでした。鍵は即座に尊徳に渡され、救済はただちに着手されました。…お役所仕事というものは、無駄な手続きを経なければならないので、その間に苦しんでいる人たちへの救済が手遅れになってしまうのです!

「手だてに困ったときの飢饉の救済法」という名高い講話を尊徳がおこなったのは、このときのことでありました。おもだった聴講者は、領主によって藩政の執行に任ぜられていた^{くにざらう}国家老でした。この講話には、講師の特徴がよく反映しているので、その一部をここに紹介しましょう。

「国が飢饉をむかえ、倉庫は空になり、民の食べるものがない。この責任は、治者以外にないではありませんか。その者は天民を託されているのです。民を善に導き、悪から遠ざけ、安心して生活できるようにすることが、与えられた使命ではありませんか。その職務の報酬として高禄^はを食み、自分の家族を養い、一家の安全な暮らしがあるのであります。ところが今や、民が飢饉におちいっているのに、自分には責任はないなどと考えています。諸氏よ、これほど歎かわしいことを天下に知りません。この時にあたり、よく救済策を講じることができればよし、もしできないばあいには、治者は天に対して自己の罪を認め、みずから進んで食を断ち、死すべきであります!

ついで配下の大夫、郡奉行、代官も同じく食を断って死すべきであります。その人々もまた職務を怠り、民に死と苦しみをもたらしたからであります。飢えた人々に対して、そのような犠牲のもたらす道徳的影響は、ただちに明らかになります。

「御家老様と御奉行様が、もともとなんの責任もないにもかかわらず、私たちの困窮のために責任をとられた。私たちがおちいっている飢饉は、豊かなときに備えようとはせずに、ぜいたく無駄遣いをしたためだ。立派なお役人らをいたまい死に追いやったのは私たちのせいである。私たちが餓死するのは当然だ」

こうして飢饉に対する恐れも餓死に対する恐怖も消え去るでしょう。心は落ちつき、恐怖は除かれ、十分な食糧の供給も間もない。富める者は貧しき者と所有を分かち、山に登って、木の葉、木の根も食べることになりましょう。たった1年の飢饉では、国にある米穀をすべて消費しつくす心配はありません。山野には緑の食物もあることです。

国に飢饉がおこるのは、民の心が恐怖におおわれるからです。これが食を求めようとする気力を奪って、死を招くのです。弾丸をこめてない銃でも、撃てば臆病な小鳥を撃落とすことがあるように、食糧不足の年には、飢饉の話だけで驚いて死ぬことがあるものです。したがって、治める者たちが、まずすんで餓死するならば、飢饉の恐怖は人々の心から消え、満足を覚えて救われるであります。郡奉行や代官にいたるまでの犠牲を待たずに、よい結果が訪れると想います。このためには家老の死のみで十分です。諸氏よ、これが、なんの手立てもないときに飢えた民を救う方法であるのです」

講話は終わりました。家老は恥じ入って、長い沈黙ののちに言いました。

「貴殿の話に異存はない」

尊徳の痛烈な話は、まじめに語られた話ではありますが、もちろん実行をねらっていたわけではありません。救済は実直に遂行されました。実直であるということは、他の即断、勤勉、苦しむ人々への強い同情、「自然」と「自然」の恵みゆたかな理法への信頼と同じく、尊徳の仕事には常にあらわれる特徴でありました。穀物と金銭が、困窮する農民に対し、5年以内の穀物による分割払いの約束で貸し与えられました。約束は、忠実に、いとわずに守られ、4万390人の窮民の、1人として約束期限に支払えなかった者を出さなかったのです! これは、救済を提供する側の深い信頼とあわせ、救済される農民側の純真な心の賜物でした。このことを忘れてはなりません。

* 以上の結果、天保7年の大飢饉小田原藩では1人の餓死者も出さなかった。

栢山 尊徳記念館周辺

二宮金次郎(尊徳)生誕の地 栢山 かやま
 尊徳の思想や生き方のもとをつくった自然や体験の場を訪ねながら、水の豊かな川べりをゆっくり歩いてみませんか。



- 【集合】11:00 小田急線・富水(とみず) 駅改札(信号付近) 集合
- ・新宿8:50発→(乗換1回)→富水10:31着 / ・新宿9:01発→(乗換2回)→富水10:43着
 - ・東京9:09発「快速アクティー(熱海行)」→小田原10:36発(小田急)→富水10:42着
- 【解散】15:30頃 小田急線・栢山(かやま) 駅解散 *昼食会のみで懇親会の予定はありません。
- 【行程】富水駅11:00 → 菜種栽培地ほか → 12:00~尊徳記念館前の喫茶店(エプーゼ)で昼食(事前申込)~ → 12:45~尊徳記念館【観覧料200円】および生家見学(1時間30分*記念館のボランティアガイドをお願いする予定) → 14:15~尊徳一族墓所・村田道仙墓所 → 村田道仙屋敷跡 → 14:45~酒匂川 → 栢山駅15:15着=解散場所
- 【昼食メニュー】 カレー950 ハンバーグカレー1600 カツカレー1600 ツナサンド900 ミックスサンド950 など